

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00819

研究課題名(和文)中国語コミュニケーション能力を育成するための言語運用能力判断基準の開発

研究課題名(英文) Development of language proficiency assessment criteria for fostering Chinese communication skills

研究代表者

曲 明 (qu, ming)

室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：60727064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第二外国語としての中国語教育における「学習/教育到達指標の新基準」の提案とその内容の実証的調査、検証を目的とする。具体的には、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment、ヨーロッパ言語共通参照枠の略称。以下CEFRと略す。)を参考にして、中国語学習/教育到達指標について「～をすることができる」という具体的なことばの機能を中心にした CAN-DO リストを開発し、またCAN-DO リストを活用した教育実践も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国語教育で求められる中国語運用能力について先行研究があるが、しかし、多くの先行研究は専門科目としての中国語教育についての考察であり、第二外国語としての中国語教育についてはほぼ研究されていない。作られたCAN-DOリストを用いて、学生たちと一緒にCAN-DOリストを分解し、個々人がそれに対する理解の確認シートを作ることによって、「～をすることができる」という学習目標までのステップが可視化され、自分は目標達成するために何をすれば良いのかが分かる。それによって、学生が主体になり、自立した学習をしやすくなる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to propose a new criterion for learning/teaching benchmarks in Chinese as a second foreign language education, and to empirically investigate and validate its content. Specifically, with reference to the CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment), the study develops a CAN-DO list focusing on specific functional expressions of "what learners can do" in Chinese language learning/educational benchmarks. In addition, pedagogical practices using the CAN-DO list were carried out.

研究分野：外国語教育学

キーワード：外国語教育

## 1. 研究開始当初の背景

第二外国語としての中国語教育は専門として行う中国語教育と違って、多くの場合、統一した教育目標もなければ、教育内容も、教科書も担当の教員に任せて授業を行うことが多い。また、多くの中国語の授業では、伝統的な文法や構造を中心としたシラバスが採用され、文法項目の説明や、発音の訓練、それから構文・単語の暗記などが中心になっている（寺西、2012）。これと対照的に、中国語教育以外の外国語教育分野では、コミュニケーション重視、機能中心、学習者中心といった新たな教育/学習法が開発されてきた。これらの成果を中国語教育にも反映させるべきだと思われる。本研究では、2001年に欧州評議会が策定したCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）を参考に、教員、教科書に依存した教育方法を改善し、学習者が主体になれる教育/学習法の開発を試みる。

## 2. 研究の目的

現在、CEFRやCan-do記述リストの概念は日本の外国語教育分野に幅広く応用されている。本研究では、第二外国語としての中国語教育において、コミュニケーション能力を育成するための学生の実情に対応した学習/教育到達目標をCan-do記述リストの形で作成し、学習者が主体となれる教育実践を行う。

## 3. 研究の方法

本研究は大きく分けて三段階からなる。第一段階では第二外国語としての中国語教育における学習/教育到達指標の新基準を提案し、学習/教育目標としてのCan-do記述リストを作成する。第二外国語としての中国語の授業において、「何ができる」という学生が修得すべき学習成果を具体的かつ明確的に示したい。第二段階ではそのCan-do記述リストについての実証的調査を通して難易度のレベル付けする。第三段階では、作られたCan-do記述リストを用いて、学生が主体になり、自立/自律した学習ができるように教育実践を行う。それぞれの段階において、下記のことを行った。

第一段階であるCan-do記述リストの作成は、言語能力、CEFRなどについての理論的な考察、使っている教科書の分析、学生のニーズ調査の4つのステップを踏んで研究を行った。

第二段階では、前年度で作成したCan-do記述リストに対して、学期末に学生に現時点でどこまでできるかについて、彼らの自己評価を尋ねた。学生の「できる」、「あまりできない」と「できない」の順に項目の難易度をレベル付けした。

第三段階であるCan-do記述リストを用いて、教育実践の実施には、二つのステップ、すなわち、1 Can-do記述リストの各項目に対する学生の理解確認とチェックリストの作成、2 パフォーマンステストを行い、チェックリストを用いて内省を促す、と二つのことを行った。

## 4. 研究成果

2019年度では、第二外国語としての中国語教育において求められる中国語運用能力とは何か、および中国語教育におけるCEFRの適用可能性について考察した。中国語教育で求められる中国語運用能力についてたくさんの先行研究があるが、しかし、多くの先行研究は専門科目としての中国語教育についての考察であり、第二外国語としての中国語教育についてはほぼ研究されていない。専門科目として中国語を学ぶ場合と比べて、第二外国語として

の中国語教育は時間が不足で（週 1～2 コマ、1 回 90 分、1 学期 15 回と考えた場合、単純計算で一年 45～90 時間しかない）、一般教養科目であるため、クラスサイズも大きい（50 人以上）ことが多い。何をどのようにどこまで教えればよいのかは難しい問題である。専門科目としての中国語教育と同じ着眼点、教育内容で教えることは無理がある。従って、第二外国語としての中国語教育の学習内容を精選する必要がある。第二外国語教育における CEFR の適用可能性についての考察は主に CEFR で主張する複言語／複文化の概念及び機能中心の考え方について分析し、日本における第二外国語教育への適用可能性について考察を行った。複言語主義の言語教育は、英語のみならず、学習する言語を複数化にし、複層的な言語文化的他者性の発見から自分のアイデンティティの確定を目指すものである（富盛、2020）。この点は日本の高等教育機関における第二外国語教育の理念と合致している。複言語主義も、行動中心主義の Can-do 記述リストもヨーロッパ発祥ではあるが、日本の外国語教育にとって、示唆に富むものであると考えられる。

令和元年は以下 2 つの研究活動を行った。一つは第二外国語としての中国語の授業の教育/学習項目をまとめることであった。もう一つはそれを用いて、中国語を学ぶ日本人大学生を対象にアンケート調査を実施したことである。教育/学習項目リストの作りに当たって、まず第二外国語としての中国語授業で使っている教科書の分析を行った。今までどのような内容を教えてきたのかについて、教科書に載っている学習内容を洗い出し、Can-do 記述リストの形で教育/学習項目のリストを作った。こうすることによって、学生の「～することができるはず」の能力項目リストをまとめ、学生向けのアンケート用紙を作成した。その後、作成したアンケート用紙を用いて、中国語を第二外国語として学んでいる大学生を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査には二つのセクションが含まれる。セクション 1 は中国語の授業を受けて、何ができるようにになりたい（何を勉強したい）のかを尋ねるものであった。もし学習したい項目がアンケート用紙になれば、書き加えるようにと学生に求めた。この時点で、Can-do 記述リストは「コミュニケーション言語活動 Can-do 記述文」、「コミュニケーション言語能力 Can-do 記述文」、「方略 Can-do 記述文」と 3 種類の能力記述文が含まれ、全 54 項目のものとなった。

令和 2 年では、前年度で作成した Can-do 記述リストに対して、学期末に学生に現時点でどこまでできるかについて、彼らの自己評価を尋ねた。学生の「できる」、「あまりできない」と「できない」の順に項目の難易度をレベル付けした。

本来では、2020 年度において、学生の自己評定と実際のパフォーマンスが適切な関連性を持つのかを検証し、上記 Can-do 記述リストの妥当性の検証を行う予定であった。しかし、コロナの関係で、出張(言語習熟度が高い学生を対象にするパフォーマンス評価を行うため)は全くできず、学生の実際のパフォーマンス評価はできなかった。そのため、科研費補助事業期間の延長手続きを行った。

2021 年度では、コロナの中で、計画通りの研究が遅くなりつつ、生徒・教師共に活用できる Can-do 記述リストに改良しようと考えた。それまでに作られて Can-do 記述リストを今後教育/学習の中でどう生かすかについて検討した。学生たちが学習の中で Can-do 記述リストに沿った評価基準を意識し、振り返りシートを記入することで、今後の学習課題などについて、自己評価及び自己分析をさせた。

2022 年では作られた Can-do リストを用いて、学生たちと一緒に Can-do リストを分解

し、振り返りシートを作る教育実践を行った。具体的次の2つの活動を行った。

一つは Can-do 尺度の下線部のキーワードを中心に、具体的どういことをできれば良いのかを学生と一緒に考えていくことである。例えば、「自己紹介ができる」という Can-do 記述に対して、今まで習った言語知識を用い、どのような語彙をどう話せば「自己紹介ができる」と言えるのかを学生たちにイメージさせて、箇条書きで「自己紹介ができる」と言えるチェックリストを作った。

もう一つは期末テストの際に、中国語学習者を対象にパフォーマンステストを行った。テストの前の復習の段階も、テスト後の反省の段階も 1 で作ったチェックリストを用いて内省を行ってもらった。上述のことを行うことにより、「～することができる」までのステップが可視化され、次は何をやれば良いのかが分かりやすく、次の学習の取り組みへと動機づけられる。また、学生の自律／自立した学習のきっかけにもなった。

#### 参考文献

寺西光輝(2012) 第二外国語としての中国語の学習者をとりまく言語環境—コミュニケーション能力の育成と「複言語主義」の観点から, 椋山女学園大学教育学部紀要 5, 47-57.

富盛伸夫(2020) CEFR 思想の根底にあるものを考える—積極的受容と無関心との間で, 科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 研究プロジェクト 『アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究 —研究成果報告書(2018-2020)—』.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 5件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Qu Ming & Eric Hagley	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 1) Evaluating the Impact of Virtual Exchange on a Chinese Language Class in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Technology and Chinese Language Teaching	6. 最初と最後の頁 49～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Qu ming & Zhao ping	4. 巻 1
2. 論文標題 In Search of 'Best Practice' in Moodle-enabled Blended Learning for Chinese Language Teaching	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Conference Paper of the 12th International Symposium on Modernization of Chinese Language Teaching	6. 最初と最後の頁 316-334
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Qu Ming, Laura Kudo, Eric Hagley	4. 巻 1
2. 論文標題 Creation of Moodle-Delivered Online Tests for Chinese Language Classes in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 (Proceedings of the 11th International Conference on Technology and Chinese Language Teaching	6. 最初と最後の頁 76-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Qu Ming, Zhao Ping	4. 巻 0
2. 論文標題 In search of 'best practice' in Moodle-enabled blended learning for Chinese language teaching	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th International Symposium on Modernization of Chinese Language Teaching	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Qu Ming, Laura Kudo, Eric Hagley	4. 巻 0
2. 論文標題 Creation of Moodle-Delivered Online Tests for Chinese Language Classes in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the 11th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 qu ming	4. 巻 16
2. 論文標題 Creation of Moodle-delivered Speaking Tests for Chinese Language Classes in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Journal of Modernization of Chinese Language Education.	6. 最初と最後の頁 30 ~ 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 曲明	4. 巻 0
2. 論文標題 学生が望む第二外国語教育としての中国語教育 - ある国立大学の学生によるアンケート調査のデータに基づいて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国語教育学会第18回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 63 ~ 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Qu Ming, Laura Kudo, Eric Hagley
2. 発表標題 Creation of Moodle-Delivered Online Tests for Chinese Language Classes in Japan
3. 学会等名 The 11th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Qu ming & Zhao ping
2. 発表標題 In Search of 'Best Practice' in Moodle-enabled Blended Learning for Chinese Language Teaching
3. 学会等名 the 12th International Symposium on Modernization of Chinese Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 曲明
2. 発表標題 Hyflex形式中国語授業の実施及びその授業評価
3. 学会等名 日本中国学会北海道支部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Qu Ming, Zhao Ping
2. 発表標題 In search of 'best practice' in Moodle-enabled blended learning for Chinese language teaching
3. 学会等名 The 12th International Symposium on Modernization of Chinese Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Qu Ming, Laura Kudo, Eric Hagley
2. 発表標題 Creation of Moodle-Delivered Online Tests for Chinese Language Classes in Japan
3. 学会等名 The 11th International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 qu ming
2. 発表標題 Creation of Moodle-delivered Speaking Tests for Chinese Language Classes in Japan
3. 学会等名 The first international conference on Linguistics Research in the Era of Artificial Intelligence. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 曲 明
2. 発表標題 学生が望む第二外国語教育としての中国語教育 - ある国立大学の学生によるアンケート調査のデータに基づいて
3. 学会等名 日本中国語教育学会第18回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Qu Ming
2. 発表標題 An Evaluation of a Chinese Language Programme at a Japanese university - Focusing on intercultural competence
3. 学会等名 JALT Pansig Conference(Japan Association for Language Teaching) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山路奈保子、曲明他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 武漢大学出版社	5. 総ページ数 11
3. 書名 『日本語文化論叢』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------